

マレーシア華人による中国語聖書翻訳史の講義 －東京での国際聖書フォーラムから－

綱島(三宅)郁子

1. はじめに

2006年5月3日から5日にかけて、東京のホテル・ニューオータニで財団法人日本聖書協会主催の国際聖書フォーラムが開催された。国内からはカトリック、ロシア正教、プロテスタントの教会関係者や大学人、無教会の聖書学者そして一般参加者が一堂に会した。ある報道によれば、三日間でのべ2,066名ほどが出席したという盛況ぶりであった。駐日イスラエル特命全権大使から祝辞を賜ったほか、イスラエル、アメリカ、スイス、ドイツ、オランダなど著名な聖書学者から専門的な講義を受けた。また、アジア地域の聖書翻訳者として、韓国、インドネシア、マレーシアから講師を招き、各講義を担当していただいた。日本国内の聖書学者やキリスト教指導者は、聖書学、聖書釈義、聖書翻訳、ギリシャ語やヘブライ語の講義、そしてキリスト教信仰の話などをされた。講義そのものはシンポジウムも含めて計29あり、その他に音楽コンサートやクイズ大会、美術展示、書籍販売なども加えた多彩な内容であった。

当然のことながら、筆者は、3月下旬からフォーラム参加を申し込み、めったとないこの機会をととても楽しみにしていた。死海文書、旧約、新約などの専門家から最新の研究成果を直接うかがえるという魅力もさることながら、何年も前からリサーチでお世話になり、ご協力をいただいていたジャワ系インドネシア人の Dr. Daud H. Soesilo やマレーシア華人の Dr. Yu Suee Yan(尤垂然博士、以下「ユー先生」)も来日されるからである。結果は、期待をはるかに上回る充実ぶり、五月連休の三日間をフルに享受した。本拙稿では、JAMS 会報の趣旨を鑑み、マレーシア関連として、ユー先生のご貢献に言及したいと思う。

2. 講師の略歴

2003年8月、筆者は、その数ヶ月前に発生したイバン語聖書問題に関する面談のため、日本聖書協会の取り次ぎにより、プタリン・ジャヤのマレーシア聖書協会オフィスでユー先生とお会いした¹。机の上はノートパソコン一台のみという端正さと、穏やかで温かい表情ながら、余計な返答は一切しないというプロフェッショナルリズムが今も印象に残っている。イバン語聖書の翻訳もチェックを担当されているとのことだったが、どのように確認するのか尋ねたところ、「まず、イバン人クリスチャンが、マレー語でイバン語の翻訳文を説明する。自分はそのマレー語を聞いて、正確な訳文かどうかを確かめる」との返答だった。いやはや、何とも大変な作業である。日本では、原語のヘブライ語とアラム語とギリ

¹ 詳細は、拙稿「相互理解かそれとも不寛容か？－マレーシアにおけるイバン語聖書禁止・解除事件の影響と含意について－」『一神教学際研究1』同志社大学一神教学際研究センター2005年 pp.21-60.

シャ語から直接翻訳した、聖書協会訳だの岩波の学者訳だの福音派の聖書刊行会訳だのカトリック訳だのロシア正教訳だの個人訳だの、同じ現代日本語に幾つかの種類があり、読み分けることも可能である。同時に、あの翻訳の何章何節には間違いがあるとか、ありがたさが優先して正確さに欠けるとか、これは差別用語だとか、自分ならこう訳すのだが何某訳はこうなっている、などと議論も多く、それをネタにまた書籍が出版されたりして、何ともにぎやかだ。それに比べてマレーシアでは、何よりも翻訳スタッフが極度に限られている上、一人で何役もこなさなければならない。読書人口も総体的に多いとは言えない。大変さの質や度合いが違うのである。

海外出張の多い方だとは知っていたが、現在のマレーシア聖書協会での肩書きは、アジア太平洋地域の翻訳コンサルタントで、中国、ミャンマー、インドなどを担当されている。ちなみに今回の招聘について、プログラム上では「シンガポール聖書協会所属」ということにされていたが、これは主催者側の政治的配慮によるものであろう。もし事実通りに「マレーシア聖書協会所属」としたら、ムラユあるいはイスラームの国であるはずのマレーシアから、なぜマレー人ではなく華人が代表になるのか、という問いを引き起こすことになり、当該地域の複雑な事情に精通しているわけではないかもしれない多くの参加者に、恐らくは不要な疑念を抱かせることになるからである。

ところで、この小文を書くため、ご本人に経歴確認のメールを送ったところ、翌日5月19日付で、出張先のタヒチから返答があった。返事を読み、マレーシアの人々を理解するには、多種多様な背景について実に幅広く勉強しなければならず、時間がかかるのだ、と改めて感じ入った次第である。

今は亡きご両親は、中国南部での厳しい環境から逃げ出して、マレーシアの僻地に落ち着き、生活基盤を築いた。すなわち福建系華人の二世であるという。(2003年の面談当時、一度東京に行ったことがあると聞いたので、裕福なビジネス華人の家系なのかもしれないなどと思ったが、今ではそのことが何とも恥ずかしい。) また、初等教育は華語国民型学校、中等教育はマレー語国民学校、そして大学と神学校では英語を媒介語とする教育を受けた。しかし、家庭では福建語を話し、聖書協会の仕事では、主に英語とマンダリンを使うという。(このことから、マレーシア華人について、英語系華人と華語系華人と単純に区分けするのは不正確であることも判明した。) 1997年からマレーシア聖書協会に従事しているが、それ以前は長老派教会牧師として、人口の99%がムスリムであるクアラ・トレンガヌ市で牧会していたという。(アメリカで博士号を取得したほどの方であるから、筆者は、首都圏で牧師をしていたのだとばかり思い込んでいた。) また、フォーラム会場での講師紹介によれば、中国語翻訳担当のコンサルタントだとの由だったので、「では、マレーシア聖書協会には何人の中国語話者スタッフがいますか」と質問したところ、マンダリンあるいは広東語を話すスタッフは計6人いるが、両方を話せるのは2人のみである、との回答だった。

旧約聖書の申命記の研究で、アメリカのヴァージニア州リッチモンドにある長老派のユ

ニオン神学校から博士号を授与されている。

3. 講義内容－中国語聖書翻訳史－

キリスト教人口が約1%しか存在しない日本においてですら、いわゆる文語訳と呼ばれる明治訳(旧約)・大正訳(新約)聖書の社会に与えた影響が計り知れないものであることは、広く知られている。実際、近代以降の日本文学や日本語に与えた文語訳聖書の力は大きい。海老澤(1989)²や柳父(2001)³や鈴木(2006)⁴などの著書から明らかなように、この文語訳が漢訳(中国語訳)と欽定英語訳を参考にしたものであることは有名である。幼稚園で文語体祈禱書を暗唱する毎日を送ったためもあり、筆者は今でも、現代語訳と並行して文語訳を好んでいる。流麗かつ典雅しかも荘重な文体は、音読に適切であるが、読んでいていつも感じるのは、複雑な漢字の用い方によって意味内容を詳細に識別しているという利点である。これはひとえに漢訳聖書のおかげである。仏教の経典が中国語訳されたことが、日本における仏教吸収の上で大きくプラスに働いた歴史を鑑みれば、聖書翻訳に関しても、我々ももっと中国語に恩義を感じるべきなのであろう。

どの講義でも同じだったように、講師はすべて英語で原稿通りに話し、受講者は、あらかじめ主催者側が用意した日本語訳のレジュメ原稿を手にしながら、パソコンを通して演壇のスクリーン上に二、三文ずつ映し出される日本語訳も、字幕さながら同時に読める仕組みであった。これは、準備する側にとっては大きな負担であるが、国際会合でよく見かける、逐語通訳の時間的ロスないしは同時通訳のコストを省略する上で、大変よい工夫だったと思われる。

内容の詳細については、2006年7月に日本聖書協会から全講義録が出版される予定なので、本稿では公表を控えることにする。ただし、マレーシア関連で明記すべき二点に触れておきたいと思う。第一は、アブドゥラー物語でも有名なウィリアム・ミルン(1785-1822)と協働した宣教師ロバート・モリソン(1782-1834)の中国着任200年を記念して、2007年には、全世界の中国系教会で祝賀行事が予定されていると冒頭で語られたことである。第二は、モリソンとミルンの翻訳による中国語の聖書全巻が、1823年にマラッカにおいて出版されたことへの言及である。

4. マレーシア華人が中国語訳聖書について日本で講演する意義

ユエ先生の講義内容は、上記三点の書籍に目を通し、中国での景教(ネストリウス派キリスト教)に関する知識があれば、ある程度理解が容易なものであった。図鑑からの地図や図表、マラッカの写真なども含めたパワーポイントをふんだんに用いた、わかりやすい講義だったからである。残念なことに、同時刻に複数講義を並行したプログラム配分のせいで

² 海老澤有道『日本の聖書－聖書和訳の歴史』講談社学術文庫 906.

³ 柳父章『「ゴッド」は神か上帝か』岩波現代文庫学術 56 岩波書店.

⁴ 鈴木範久『聖書の日本語－翻訳の歴史－』岩波書店.

あろうか、全講義中で参加希望者が最も少なく、30名ほどであった。そのため、主催者側のトップまで受講生の席に加わるという一幕もあった。それでも質疑応答では、韓国、中国出身者の質問も加えた5名ほどがマイクに立ち、具体的な質問をしていたことから、ユ一先生のご講義そのものはうまくいったと言えよう。

筆者が知りたかったのは、東南アジアの華人にとって、中国語訳聖書の位置づけや意義はどのようなものか、ということである。特に、マレーシアで聞かれる華語が、北京官話とは発音も語彙もやや違うことは素人にもすぐわかる。その場合、日本でケセン(気仙)語訳聖書や大阪弁聖書が作られたように、マレーシア版華語聖書を生み出す可能性はあるのかどうか、気になるところだった。筆者が発言するまでもなく、別の参加者から、ブラジルなど海外在住日系人の‘古風な’日本語を引き合いに、同様の質問が提出された。ユ一先生の回答は、「否」であった。香港や台湾ではある程度の自律性があるが、マレーシアやシンガポールの在外華人は、結局のところ、中国大陸の標準中国語を志向し、できるだけ共通の版を考えているからであるという。資金面の問題もあるのだろうが、話者人口数、自言語に対する意識の強さ、各地域での異文化への同化程度などの観点から考察するならば、これは大変興味深いテーマだろう。

しかし考えてみれば、マレーシアの国語および公用語はマレー語のみであるのに、肝心の国語訳聖書に関して、せつかくのマレーシア人の講義で一言も触れられないのは遺憾といえど遺憾だ。主催者の意図としては、いわば言外の暗黙事項を読み取ってほしいというところだろう。マレーシアでは、国語普及キャンペーンが1970年代から展開されてきたものの、キリスト教内でのマレー語使用に関して、その内実は複雑な事情を有しており、しかもその制約のために、中国語のように数十種類もの聖書翻訳が試みられたわけではない。同じムラユ・イスラーム圏に位置する隣国で、同根の言語で数種類の国語訳聖書が出版されているインドネシアとは対照的である。また、先住民族の人々が用いるマレー系諸語の聖書翻訳は、基本的にはマレー語聖書を参考にしている部分が多いというが、これについても全く今回は言及されなかった。華人だからではなく、講義の趣旨から外れるからであろう。

5. フォーラム会場でのエピソード

フォーラムでは思いがけない出会いに恵まれるものである。質疑応答の際、初めは丁寧な日本語で話し始めた一人の男性が、途中から流暢なマンダリンで質問を続けた。ユ一先生もうれしそうに英語からマンダリンに切り替え、応答されていた。講義終了後に尋ねると、1980年代に同志社大学大学院神学研究科で学び、今は東京四谷で日本基督教団の牧師兼幼稚園長をしている方だという。驚いたことに、筆者の名前も前から知っているとのことであった。

マレーシアで首都圏の教会を回ってリサーチをしていた6年前、英語学校で教育を受けたマレーシア人は外交的ではっきりと物を言う傾向にあり、華語学校やタミル語学校など

で教育を受けた場合は遠慮がちである、と聞いたことがある。では、両方の学校で教育を受け、海外留学経験者でもあるユ一先生はどのようなのだろうか。今回の筆者の観察によれば、後者に該当すると感じられた。講義中は、臆せずマレーシアなまりの英語でニコニコしながら堂々と話されるのであるが、自分の担当が終わるとすぐに胸のリボンを外し、混み合う一般参加者の一人に紛れてしまうのであった。日本や欧米の学者先生達は、どの会場でも、さっさと一番前の予約席に座られる。一方、招待講演者の一人なのにも関わらず、ユ一先生は、我々一般参加者よりも後ろの方にいらした。最終日のシンポジウム会場では、さすがにスタッフが慌てて背中を押して、前の特等席に座ってもらっていたのを見かけた。これはどういうことなのか、通訳が不十分で意思疎通が成立しにくかったのかもしれないし、謙虚で控えめなご性格なのかもしれない。ご本人に確認しなければ真相は不明である。

筆者なりの憶測では、次のようなことになる。マレーシア聖書協会の前総主事であったサバ州客家のルーツを持つ **Dr. Victor Wong** から以前うかがったことであるが、「海外のキリスト教関連の国際会議に招かれるたびに、自分達の国の実情を知ってもらいたいと願ってはいるのだが、同時に、事実が外国人に知られるのを恥ずかしく思っている」というのである。慣れていないという理由もあるのだそうだが、長年マレーシアと関わってきた筆者にも、何となくその気持ちはわかるような気がする。途上国とか第三世界だとかのネガティブな偏見で自分達を範疇化されたくはない、というプライドはある。自分達もこんなに頑張っているのだ、と認めてもらいたい気概もある。マレーシアは複雑な多民族多宗教の国家だが、平和で調和のとれた住みやすい社会でもある、と宣伝もしたい。しかし一方で、マレー人問題やイスラーム化政策によって、移民系であるマイノリティの自分達が二級市民扱いされ、社会的にも周縁化されたり抑圧を受けたりする事情を、どのように的確に伝えることができるだろうか。下手をすると、単なる不満分子の嘆きではないかと誤解されかねない。また、過大に受けとめられて、双方から原理主義的な感情反応を引き起こすことも避けなければならない。本当のことを理解してもらいたいのだが、地域事情を知らない人にはお笑い草となるのではないだろうか、なぜ「そんな程度」のことが大騒ぎになる国なのか、と言われるかもしれないのではないか。

このジレンマは、恐らくすべてのマレーシア人が多かれ少なかれ抱え続けているものであろう。そして、その解答の一つは、地域事情に深く関わった外部者が、それぞれの方法で、できる限り正確に内外に事実を伝える努力を積み重ねていくことではないだろうか、と思われる。

しかしながら、今回、東京が会場になったことで、マレーシアの代表者にも、日本の学者のみならず、イスラエルや欧米の有名な聖書学者の講演をも直接耳にする機会が提供されたとも解せる。シンガポールや香港などでならともかく、マレーシア国内では恐らくありえない催しであらうからである。

6. 結び

今回の国際聖書フォーラムは、熱気に包まれた心地よい興奮のうちに幕を閉じ、まずは大成功であったと言えるであろう。この背後には、主催者側の周到な準備と巧みな宣伝戦略がうかがえる。筆者が何よりもうれしかったのは、従来、聖書学を世界的にリードしてきた欧米学者に追従する傾向の強かった日本のキリスト教組織が、この度、アジア地域にも実質的に配慮したことである。しかも、漢字文化圏として共有項を持つ韓国はともかく、香港や台湾などではなく、マレーシアとインドネシアの翻訳責任者を東京に招いたという意味は大きい。(ちなみに、講義担当はなかったものの、ラオスやパキスタンからもゲストが来日された。特に、パキスタン聖書協会の代表者が積極的にアメリカの聖書学者に質問していた姿は、筆者に強い印象を残した。) 全く幸運なことに、お二人とも筆者にとっては恩義のある関係者だったのである。

日本聖書協会の渡部信総主事によれば、現在の中東における需要を反映して、日本で印刷し製本したアラビア語聖書をエジプト聖書協会に送る仲介役を担っているという。周知のごとく、北アフリカや中東地域は、古くはキリスト教圏であった。聖書は、ユダヤ教とキリスト教の源泉のみならず、イスラームにも多大な影響を与えた古典的書物である。聖書に対していかなる立場を取るかは別として、これを知らずに、現代世界の諸問題を真の意味で専門的に語ることは、恐らく不可能であろう。聖書を仲立ちとする絆が支えとなって、筆者はこれまでマレーシアに関するリサーチと勉強を続けることができた。そして今後も続くに違いない。今回のフォーラムで新たな刺激を受け、意を強くした次第である。

(2006年5月22日記 5月25日修正)

